

克枝ちゃん



首藤 葉子

「首藤」

彼女が最初にわたしを呼んだのは、意のままにならない時であった。抑えようもない心からすらりと。しかしわたしはうれしかった。呼びずては彼女の愛の呼びかけである。三年間固く口を閉ざし続けてきた克枝ちゃんに、いつ話しかけられるか、そのことにかけていたわたしの大収穫でもあるのだから。聞こえないふりをしているわたしを、ちらりと見た克枝ちゃんは、何うように声を和らげて呼び直す。

「首藤さん」

彼女に父はいない。一人の姉がいる。学校では自分のペースで字を書くだけ。五年生の現在、五十音で字だけ読めるのは十六。数は二十まで。逆に言えるのは十から。丸はほしいので、気が向

けば家で五冊ものノートに字を書いてくる。そんな彼女が、わたしに話しかける。これはまさに天の声なのである。

「先公」

きげんのいい時、やり場のない時、大声で呼び続ける彼女に、もちろん用のあるはずはない。すましていると、「てめえ、わかってんのか」

とくる。淋しいむなし。そして悲しいわたしのひとみをなんと受け止めているだろうか。克枝ちゃんは。

「せ・ん・せ・い」

退屈な時、なんとなく寄ってきて、きげんを伺いながら口にするのがこれ。こうなるまでに十か月。わたしはやさしくからだでこたえる。

「先生」

電話のむこうから、小さなためらい

の声が届く。わがままに甘やかされた克枝ちゃんは、お母さんに注意されたり、友達に何か言われたりすると、直ちに登校拒否の挙に出る。つまり、廊下まで来てUターン。それが昇降口になり、校門になり、友人の家と遠のき何度迎えに行つたことか。さんざん手こずらせたあげくのわびの電話から、彼女の心や顔が手にとるように読まれる。克枝ちゃんのことを案じているわたしの心が通じるようである。

「ごめんね。あした行くから」

一年たつて何んでも話すようになつた。やつとわたしの翼の中に入り込んできた克枝ちゃん。

しかし、わたしにはもう一つの残された問題がある。彼女は給食をとらず三時すぎまで授業を受けていることであ



今度はもう一つの山をめざしていこう

る。どんなことをしてみても食べないで、テレビを観たり、教室を出歩いたりしているのである。どうにかして食べさせようとするど、

「あした学校やすむ」

わたしが一番困ると知つての上の切札なのである。ときどき、教室に一人残してせんべいをあげれば、にこにこ、ぼりぼり食べるのである。ここから何か糸口がつかめそうに思えるのだが。

家庭訪問の時、店の前で何か買つてあげると言つたら、即座に『チョコレート』とこたえた。家に着くと、克枝ちゃんは大きな茶わんにコーヒをいれてくれた。帰りに折鶴数羽、キャンデー五こをくれ、子供に話すように、「あめ、なめたら一重君の家に行きなね。どうやらわたしは、すつかり克枝ちゃんの精神年齢になつたようである。」

「葉子さん」

になり、着替えの手伝いをする克枝ちゃん。ボタンをかけたたり、ベルトをしめたりしてもらうわたしのからだは、柔かにとけそう。されるままにしてみる。

わたしは今、清涼剤を飲んだ後のように、なんともさわやかである。克枝ちゃんとはめぐり合い、克枝ちゃんとお話し、そして、克枝ちゃんの心と結び合うことができている。もう一つの山、給食をとらせることは、遠い高い山なのかも知れないけれど。とにかく五月の空である。

(いわき市立湯本第二小学校教諭)